
少女たちの長い夜

霜月

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

少女たちの長い夜

【Nコード】

N5280Q

【作者名】

霜月

【あらすじ】

——霞ヶ原高等学校 修学旅行2日目 夜。

小さな明かりが、夜の語らいを楽しむ少女たちを照らし出す。

やがて、明かりが消え、全てが闇に支配されたその瞬間。

少女たちの可憐な声は、耳をつんざく悲鳴に変わる。

襲い来る恐怖、広がる血だまり、崩壊してゆく友情。

少女たちを狂気へと誘う、黒い影。

『一緒ニ逝コウ？』

はたしてこの夜は、永遠なのか、否か。
——朝はまだ、来そうにない。

登場人物紹介

かんざき えみ
神埼絵美

●まったく癖のない髪を、肩甲骨あたりまで伸ばしている。
とくに結んだりはしていない。

●外見からは、優しく穏やかな印象を受ける。
妹の百合とは双子だが、あまり似ていない。

●穏やかで優しい。根が真面目な優等生タイプ。
時折、芯の強さを垣間見せることもある。

かんざき ゆり
神埼 百合

●まったく癖のない、短めのツインテールが特徴。
下ろしたときでも、髪の長さは肩にぎりぎり届かないくらい。

●外見からは、穏やかでほんわかとした、『おっとり系』の印象を
受ける。

姉の絵美とは双子だが、あまり似ていない。

●姉と同様に、穏やかで優しい。

おっとりした少女。
基本的に気弱だが、性格は明るい。

水野 みずの
夏樹 なつき

●まったく癖のないショートヘアが特徴。

●外見からは、明るく無邪気な印象を受ける。

●明るく元気で、細かいことは気にしない、豪快な性格。
凛々しくて頼りがいのある少女。
言葉遣いが男性っぽい。

白川 しらかわ
琴葉 ことば

●天然パーマのかかったセミロングヘア。

●外見からは、おしとやかな印象を受ける。

●穏やかで、物腰が柔らかい。時折、大人びた一面を見せる。

基本的に物静かだが、芯の通った少女で、言うべきことはきちんと言う。

柚木 ゆずき
楓 かえで

●少々癖のある長髪を、右下でたばねている。

●外見からは、クールな印象を受ける。

●冷静沈着で大人びている。また、素直になれない一面もある。勘の鋭さゆえに、不思議な子だと思われることが多い。

プロローグ

——霞ヶ原高等学校、修学旅行2日目の夜。

指定の場所を見て回り、自由行動を存分に楽しんで、夕食と入浴を終えた5人の少女たちは、割り当てられた部屋でのんびりと過ごしていた。

「あー、かなり疲れたぜ」

そうやってため息を吐いた夏樹だが、その表情はとても晴れやかだ。よほど楽しく、充実した時間を過ごすことができたのだろう。

——それは、誰しも同じであるようだ。

「でも、すごく楽しかったよね」

仰向けに寝転んだ夏樹の顔を覗き込みながら、百合が笑う。それを見て、彼女の双子の姉である絵美も優しく微笑んだ。

「でも、明日で終わりなのよね……なんだか、寂しいわ」

「……そうね。でも、いいじゃない。日常は日常で楽しいんだから」

そう言いながら髪を束ねているのは、楓だ。

風呂場では綺麗なストレートだった髪も、

ドライヤーで乾かされたことによって、ほんの少し癖のある髪に戻っている。

「そういえば楓ちゃん、どうして髪、結んでるの？」

あとはもう寝るだけなんだから、ほどいておいたら？」

「ん？ 邪魔だから、寝る直前までこうしておくの」

不思議そうな様子で尋ねた琴葉に、楓がそう返答する。

——そして、そのやり取りを聞いていた百合も、会話に加わった。

「わかるよ、それ。

だからわたしも、いつもこのままなんだ、髪型」

ふわりと揺れたツインテールから、優しげな香りが漂う。

——絵美と同じシャンプーの香りだ。

「ああ……それに、百合はその髪型、気に入ってたしね」

「うん。……昔ね、自分で髪を結えなかったとき、

お姉ちゃんにこれを教えてもらったからなんだよ。

“簡単にできて、百合にも似合うから”って言われて」

「なるほどな、だからかー。」

ま、たしかに似合ってるぜ。百合は、女の子っぽくて可愛いもんな」

百合らしい純粋な理由に納得して、夏樹が言った。

「えへへ、ありがとう。なっちゃんも可愛いよー」

予想外のことを無邪気な笑顔で言われて、夏樹は照れくささのあまり顔を赤く染める。

普段は女の子らしい一面をあまり見せない彼女だが、こうした反応もするらしい。

「……そういえば、夏樹はドライヤーしないの？
髪が傷んでしまうわよ、せっかく綺麗なのに」

「んあ？ あたしはいいよ、面倒だしな」

絵美に尋ねられて、夏樹はそう答えながら髪を手櫛で整える。
その様子を見て、楓が呆れたように呟いた。

「……だから、男子にオヤジくさい、なんて言われるのよ」

「楓だって変人扱いされてたじゃないかあ」

「うるさいわね、“変わってるよな”って言われただけよ」

「どっちもあんまり変わんないだろ……」

二人の言い争いは、なおも続く。

「まあまあ、他の部屋の人の迷惑になるから、そのへんで……」

琴葉が止めに入るが、2人の言い争いは一向に収まる気配を見せない。

それどころか、より一層激しくなってゆく。

今のところ本気で喧嘩しているわけではなさそうだが、

この2人のことだ、意地を張り合って、いつ本気の喧嘩に発展するかわからない。

——だが、琴葉のそんな心配は、ある少女の言葉によって杞憂に変わる。

「うーん、楓ちゃんは変人っていうよりも、
ちよつと不思議な、えと、うーん……占い師さんみたいな感じな
んだよ！」

なっちゃんはね、オヤジくさいんじゃないくて、さっぱりしてて凜
々（りり）しいの」

——百合だ。

それほど多くのボキャブラリーを持ち合わせていないがゆえに、
しつくりくる褒め言葉にはなっていないのかもしれないが、
2人の言い争いを止めるのには十分だったようだ。

「……占い師、ねえ。まあ、悪い気はしないけど」
「凜々しい……か。そう言ってもらえると嬉しいぜ」

百合のおかげで、とりあえずうるさいと苦情を言われる羽目にはな
らずに済んだ。

絵美が、よく2人を止められたわね、と百合を褒める。
そういえばそうだな、と夏樹もそれに同意した。

「……ふえ？なんで？」

だが、当の本人は何のことだかわかっていないらしい。

——どうやら、別に喧嘩の仲裁をしようとしたわけではなかったよ

うだ。
こういうところも、百合が人を引き付ける要因の一つなのかもしれない。

言い争いも終わり、仲良く笑いあっていたところに、ノックの音が響いた。

その場にいた全員が、何かとドアに注目する。
すぐにドアが開かれて、彼女たちの担任教師である及川優子が顔をのぞかせた。

「盛り上がっているところ悪いけれど、もう消灯時間よ。」

明日に差し支えがあるといけないから、ちゃんと寝なさいね」

「は、はいっ！」

慌てて返事をして、布団をもう一度整え始めたのは、生真面目な絵美だ。

それを見て、どこかぼうつとしていた百合と琴葉がそれに続く。
楓と亜美はまだ寝る気にはならないようで、
とりあえずといった感じで乱れた布団にもぐりこむだけだった。

くすくす、と笑って、及川はドアを閉める。
——生徒たちがすぐに寝るわけでないことを、彼女は重々承知しているようだ。

教師も昔は子供だった。
それゆえ、消灯時刻を過ぎてから、こっそりと部屋で静かに語り合
う楽しさを知っている。
だからこそ、たいがいはこうしてやんわりと促すだけにしておくの
だ。

（皆楽しそうでよかったわ……いい思い出を作ってね）

心の中で呟いて、長い廊下を歩いてゆく。
そんな及川に、同じ教職員のひとりである高野が声をかけた。

「あ、及川先生。良かったですね、何事もなく」

「そうですね。みんな、とっても楽しそう」

「そりゃあそうですよ。たぶん皆、これからがお喋りの本番なん
でしょうね」

「ふふふ、うるさく騒がない限りは、大目にみるとしましょう」

「そうですね。夜の語り合いは、一番の思い出になりますから」

——今日この日はきっと、最高の思い出になるだろう。
そう確信して、教職員達は和やかに笑っている。

くれないいろ
紅色をした鎌のように細い月が、闇色の空から見下ろしていた。

怖い噂

「そういやさあ、この部屋って、何号室だっけ？」

もぞもぞと布団からはい出してきた夏樹が誰にともなく尋ねる。
それに答えたのは、絵美だった。

「え？ えっと……402号室、じゃなかったかしら」

「ふふ……だったよな……」

そう言って、にやりと嬉しそうな笑みを浮かべる夏樹。
琴葉がそれを見て、怪訝そうに小首をかしげる。
夏樹は少しうつむいてから再度顔をあげ、
なんとも形容しがたい表情を作って、言った。

「あたしな、この部屋の怖い噂を知ってるんだ」

「……」

「ふ、ふええ！？」

まるで三流の語り部のような表情を見て、

楓はあきれたような視線を投げ、百合は震えあがり、絵美と琴葉は苦笑した。

夏樹はその反応に満足できなかったようで、不満げに口をとがらせる。

「なんだよー。結構怖いんだぜ、この話」

「……どんなお話なの？」

琴葉の質問を受けて、夏樹は待ってましたと言わんばかりの笑みを浮かべる。

「だいぶ前にな、この旅館のこの部屋に……
修学旅行でやってきた、5人の女子生徒が宿泊したんだ」

「わ……わたしたちと、おんなじだね……」

不安げに身体を震わせて、百合が絵美の左腕にしがみつく。

絵美は、大丈夫よ、と苦笑しながら、

まるで小さな子供をあやすかのようにして百合の頭をなでた。

(……幼いよね、百合って)

琴葉の心の中のつぶやきは、誰にも届かない。

「それでな、その子たちは、くじ引きによって同じ班になった子たちで……

運悪く、4人のいじめっ子と、

1人のいじめられっ子っていう組み合わせだったわけさ」

ごくり、と絵美がつばを飲み込む。

飲みかけの炭酸飲料水に伸びた楓の白い手が、ずっと引っ込んだ。なんとなく、重い空気に気圧けおされてしまったらしい。

「それでな……4人は、いつものように例の一人を虐げた。

布団で顔ごと簀すま巻き状態にしてみたり、蹴り飛ばしたり、ひっぱたいたり、

……まあ、ほかにもいろいろとな。

だが、この日……そいつ、いじめられてたやつがな、一人に反撃したんだよ。

突き飛ばして馬乗りになって、首を絞めたのさ。

ほかの3人は必死で仲間を助けようとしたけど……

無理だったよ、力が及ばなかった」

「……3人がかりでかなわない……か。よっぽどの怨みがあったのね」

「楓の言うとおり。……で、結局首を絞められた奴は殺されちゃったんだ。

あとの3人は逃げだせばいいものを、すっかりおびえちゃってな、動けなかった。

まず、一人が飾ってあった重たい額縁入りの絵画でガンガン叩かれて、

血だらけになって死んだ」

「……ひい……」

「ゆ、百合……大丈夫？」

「う、うん、平気……」

絵美と百合が言葉を交わす。

どうやら百合には、こういった話に対する耐性が全くないらしい。

「もうひとり……ほんとは2番目の犠牲者だ。

絵画でたたかれてる友人を助けようとしたところを突き飛ばされ、打ち所が悪くって、しばらく痙攣した後、死んだ」

「……さ、最後は？」

「……こいつが一番かわいそうかもな。仲間の死にざまに怯えて逃げ出して、

ドアノブをつかんだところで、

頭をつかまれ、壁に何度も何度も打ちつけられて、死んだ」

「そ、そんなことが……この部屋でっ……!？」

百合がさらに激しく震えだし、絵美の左腕により強くしがみつく。

そんな彼女の肩を、絵美は空いている右腕で抱く。

——絵美の方も、かなりおびえてしまったようだ。

「……怖がりすぎよ、百合ちゃん。

夏樹ちゃんったらもう、話すの上手いんだから……

どうせ、ただの噂、でしょう？」

琴葉が苦笑を浮かべてそう言うと、夏樹はあっけらかんとした笑顔に戻り、言った。

「あっははは、その通りだぜ。

8つ上の従兄がな、高校の時に学校ではやった話なんだよ、って教えてくれた。

情報源もないし、事実を確かめようもない。どう考えても作りばな……」

「作り話ナンカジャナイヨ」

——突如、ここにいない何者かの声が響く。

驚いた5人が顔を見合わせたその刹那……再び響く、違う声質の笑い声。

重なっている笑い声は……ちょうど4人分くらいだろうか。

「ドアを開けてっ！」

普段は物静かで冷静な楓が、慌てた様子で声を張り上げた。
これはただ事ではないと考えた絵美が、ドアを開けようと立ち上がる。

琴葉も反射的にそれを追っていた。

「あ……あう……」

姉の絵美が自らのそばを離れたことが原因だろう。

……精神が不安定になっているらしい百合が、恐怖に満ちたうめき声を漏らす。

血を分けた愛しい妹のその声に、絵美は思わず立ち止まってしまった。

「……！」

本能で危険を感じ取った琴葉がドアに手を伸ばしたが、もう遅かったように――。

パリン、という甲高い奇妙な音とともに、電気が消えた。
彼女たちの空間を、闇が支配する。

「いやあああああああ！！」

一番大きな悲鳴を上げたのは、百合だ。

「百合、落ち着きなさいっ!」

「や、やだあ、お姉ちゃん、お姉ちゃんっ……たすけてえっ……」

楓の声は、百合に届かない。

一番早く暗闇に目が慣れた夏樹が、自分のバッグを探し当て、懐中電灯を取り出す。

スイッチを押されて点灯した懐中電灯によって、うずくまる百合が照らし出された。

「百合、落ち着け、大丈夫だ、あたしがいる! 楓も絵美も琴葉も、みんないるっ!」

「うああああ、怖い、怖いよっ……なっちゃんっ……」

「大丈夫、大丈夫よ、百合ちゃん。絵美はここ、私の隣にいるわ!」

「みんな、こっち! 走って!」

そう叫んで、楓が夏樹の懷中電灯をひつたくる。
それから呆氣にとられている夏樹の手を引いて、“出口”へと導いた。

同時に、夏樹にしがみついていた百合も引っ張られてゆく。

比較的冷静であつた絵美と琴葉は、懷中電灯の明かりを頼りに、自力でそのあとを追って行った。

怖い噂（後書き）

5人を襲う恐怖。悲劇の幕開けは、これから――……。。

【続く】

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5280q/>

少女たちの長い夜

2011年10月8日16時53分発行